

幼稚園の5歳児が人と関わる力を育むために

－「他の幼児」から「友達」へ－

林 富公子

キーワード：5歳児、人と関わる力、幼稚園

I. 問題と目的

1. はじめに

平成27年度より「子ども・子育て支援新制度」の実施により、①全ての子どもに質の高い幼児教育が提供されること、②保育の量的な拡大・確保と教育・保育の質的改善などが取り組まれていること、③幼稚園と小学校の接続や¹⁾国際的にも幼児教育の重要性への認識の高まりがあることなどから、平成29年3月に幼稚園教育要領が改めて告示された。

この改訂された幼稚園教育要領では新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」²⁾が示された。これは「①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現」³⁾の10の姿のことである。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園における子どもの活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

同時に、幼稚園教育要領（平成29年3月告示）ではこれからの幼稚園には学校教育の始まりとして次のような三つのことが求められている⁴⁾。①学校教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識すること、②あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えること、③豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることの基礎を培うこと、である。

つまり、幼児はこれからの世の中を生きていく為に、自分に自信を持って、他者と協働し、自分で人生を切り開いていく力の基礎を幼稚園で身に付けていく事が求められている。そして、その為に幼稚園の教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共に良い教育環境を創造することに努めること⁵⁾が必要であると言われている。

一方、幼児は教師との関係を基に幼稚園生活を楽しむ中で「他の幼児」や「友達」との関わりに目が向き始める⁶⁾。他の幼児がしていることに興味を持ったり、それを自分も真似してみようとして取り組んでみたり、友達が園に来ていると嬉しかったり、一緒に遊んでみたり、時にトラブルがあったりと幼児は他の幼児や友達との関係を深めていく。

「友達」を辞書で調べると「親しく交わっている人」⁷⁾、「一緒に勉強したり遊んだりして親

しく交わる人」⁸⁾、「対等の立場で親しく付き合っている人」⁹⁾、「志や行動を一緒にして、いつも親しく交わっている人々」¹⁰⁾と出てくる。このことから「友達」と言うのは「対等の立場で、何か一緒にの志を持ち、相手の事を思いやりながら遊んだりする中で親しく関わる人」という事が考えられる。つまり、幼児は他の幼児と関わる中で対等な立場の友達と出会い、相手のことを思いやりたりするなど生きていくうえで必要な力を身に付けていく。

このようなことから学校教育の始まりとして幼児に求められていることは、教師との関係をベースに他の幼児や友達との関係の中で修得できるのではないかと筆者は考えた。

2. 幼稚園教育要領に見る「他の幼児」と「友達」との関係

幼稚園教育要領では「他の幼児」と「友達」を分けて記載している(Table1)。Table1からも分かるように、「他の幼児」の表記箇所は、教育課程編成上の留意事項や領域における内容の取り扱いである。内容の取扱いとは、教師が領域の意義づけを理解し、幼児の生活を通して総合的に適切な指導・援助・配慮をする際の視点のことである¹¹⁾。またその部分の内容を見ていくと「教師や他の幼児」、「他の幼児との関わり」、「他の幼児の考え（表現）に触れる」というように3つに分けることが出来た。

このように「他の幼児」の記載箇所は教師が教育課程の編成や内容の取扱いにおいて「教師や他の幼児」、「他の幼児との関わり」、「他の幼児の考え（表現）に触れる」事が出来るように幼児に指導する際の視点であることといえる。

また、「(1)幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり、幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになり、やがて幼児同士や学級全体で目的をもって協同して幼稚園生活を展開し、深めていく時期などに至るまでの過程を様々な経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること」にもあるように幼児は「教師」と関わる中で「他の幼児」に目が向く。そして、教師は幼児は「他の幼児と（実際に）関わる」ことや、「他の幼児の考えや表現に触れる」事が出来るように援助や配慮をすることが求められていることがいえる。

このことから、幼稚園教育要領における「他の幼児」に関する記載には「教師」が「幼児」と「他の幼児」を繋いでいく指導が含まれていると考えられる。

一方、「友達」は「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」、「ねらい」、「内容」の箇所に記されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼児が幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力¹²⁾を一体的に育むよう事が出来るように教師が努めるものである。「ねらい」とは幼児が生活を通して発達していく姿を踏まえ、幼稚園教育全体を通して幼児に育つことが期待される心情・意欲・態度などであり、内容とはねらいを達成するために教師が指導・援助・

配慮し、幼児が身に付けていくことが望まれるものの事である¹³⁾。

この「友達」の箇所でも「他の幼児」と同様に幼児が身に付けることが望ましい事柄に対する教師の指導・援助・配慮が書かれている。一方、「友達」の記載箇所はその内容を見ると「先生や友達」、「友達と楽しく関わる（活動する、触れ合う、食べる）」、「友達の様々な考えに触れる」、「友達と心を通わせる（関わりを深める）」の4つに分けることができた。

教師の指導・援助・配慮や「先生や友達」に関することは似ているがその内容を見ると「(1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする」のように幼児自らが主体的に「友達」に関わっていく様子が書かれていると思われる。さらに「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる」とあるように幼児が主体的に「友達」と様々な体験を重ね、関わりを深めていっている様子が分かる。

このことから、「友達」に関する記載箇所は幼児の主体的な行動に繋がっていることが言える。

3. 幼稚園から小学校へ

一方、小学校との接続にあたっては、幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ小学校教育が円滑に行われるようにすることが言われている¹⁴⁾。同時に最初にも述べたように幼稚園終了時の姿として「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が幼稚園教育要領で表されている。このことから、小学校へ向けた繋がり単なる教師間の連携や子ども同士における行事などの交流を通したものでないことが考えられる。つまり今回の幼稚園教育要領では、途中過程とはいえ幼児自身が小学校に向けて必要になってくる力が述べられていると思われる。

しかし、保育を学んでいる学生に小学校に向けて幼児はどのような力が必要か聞くと「椅子に座っていることが出来るようになる」や「ひらがなを書ける」、「計算が出来る」と言うことが多い。

誤解のないように記すが、ここで述べられている資質・能力は単に学生が考えるような、文字を書いたり計算をしたりすると言う小学校以上の学習を先取りするものではない。幼稚園で子ども達が育む資質・能力とは子どもが様々な教師や他の幼児との人間関係も含めた環境を通して様々な物事に会う中で、心動かされる体験をし、問題を見出したり解決したりする力のことである。

5歳児は、友達との活動の中で言葉による伝達や対話の必要性が増大し、友達との話し合いを繰り返しながら自分の思いや考えを伝える力や相手の話を聞く力を身に付けていく。そしてその中で起こるけんかや主張のぶつかり合いを通して集団としての機能が高まり¹⁵⁾、集団遊びの中で役割を担い協同しながら遊びを接続し発展させていきその中で社会生活を送る上で大切

な自主と協調の姿勢や態度を身に付けていく時期であるという¹⁶⁾。

Table 1 幼稚園教育要領に見る「友達」と「他の幼児」との関係

			他の幼児	友達
第一章 総則	わ2りま幼稚園教育にほしいて資質・能力及び「幼児期の終	(3)協同性		友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
		(4)道徳性・規範意識の芽生え		友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立つて行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
		(6)思考力の芽生え		身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
		(9)言葉による伝え合い		先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
		(10)豊かな感性と表現		心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。
第二章 ねらい及び内容	健康	割第と3編成教育課程の役割	(1) 幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり、幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになり、やがて幼児同士や学級全体で目的をもって協同して幼稚園生活を展開し、深めていく時期などに至るまでの過程を様々に経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること。	
		意成計3事上画項の指留作導	(4) 幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること。	
		2 内容		(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。 (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
第二章 ねらい及び内容	健康	3 内容の取扱い	(1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。	
			(4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。	
			(5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。	

第2章 ねらい 及び 内容	人間 関係	2 内容		(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。 (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。 (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。 (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。	
		3 内容の取扱い	(2) 一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること。 (3) 幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。 (4) 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。		
		環境	3 内容の取扱い	(1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。	
		言葉	1 ねらい		(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。
	2 内容			(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。	
	3 内容の取扱い		(1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わるにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。 (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。		
	表現	3 内容の取扱い	(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。 (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。		

この様に見ていくと、5歳児がクラスの中で他の幼児と関わる中で友達関係を築き様々な活動を行うことが小学校との連携において必要な事ではないかと考えられる。

4. 幼稚園における5歳児の友達に関する先行研究の概観

幼児は様々な形で友達と言うものを捉えている事が5歳児に対する聞き取り調査で言われている。ここでは、5歳児が子ども一人ひとりによって仲の良い友達仲の良い友達が不在の時に抛り所になる友だち、仲の良い友達とは別の遊びをする時の友達、一緒に遊ぶ機会の多さ・少なさで友達と考えるのではなく強く相手に思いを寄せているという事が述べられている¹⁷⁾。

幼児が集団のルールのある遊びの中で友達同士のかかわりを深めていることとして次のようなものがある。幼児が最初はボールをけて友達同士遊んでいる中で既成のルールではなく自分たちなりのルールを幼児同士が納得や説得したりしながら合意を形成し「楽しくサッカーをする」と言う目的に進めている様子が描かれている¹⁸⁾。ルールのある遊びを通して5歳児が人とのかかわる力を育むために必要な教師のかかわりとして、①ルールと自分の思いとのほぎまで葛藤をしている子どもの思いと一緒に遊んでいる友だちと共有できるようなきっかけをつくること、②教師が幼児の思いをしっかりと受け止めながらも、自分の言葉で周りの友だちに伝えられるように見守ること、③子どもが少しモヤモヤしている時に子どもが葛藤に向き合う時間を作ること、④上手く遊びがすすめられない状況ができたときに、みんなで一緒になって考えすすめていけるように支えていくこと、であると示している¹⁹⁾。

クラスの集団遊びとしては、協同的な活動を述べたものがある。幼児が力を合わせて一つの活動に取り組む中で、幼児一人一人が自分の持てる力を十分に発揮し友達と関わって活動することや、関わりあって学ぶことが言われている。そしてその喜びを実感する為に教師は、幼児一人一人の理解を深め、幼児が持てる力を十分発揮できる場を作っていくことが求められているとされている²⁰⁾。5歳児の生活が充実し子どもたちの世界がより豊かになるための協同的な学びに向かうひとつの方法として、テーマをもった保育を視点として「協同的な活動」を生み出すための保育のあり方が模索されている²¹⁾。

一方、幼児の協同的な活動を支える保育として次のようなものがある。①子どもの情緒面の安定、②少人数での協同に繋がる経験の蓄積、③ストーリー性や継続性のあるテーマへの発展、④協力状況を生み出す物的環境の提案、⑤友達との関係の構築とリーダーの育成の5つが必要である²²⁾。また子どもの協同的な活動に関する研究は行事などを通して協同性を育む遊びが展開されていく為の保育者の援助やそれらにおける子どもの学びに関する研究がある^{23) 24) 25) 26)}。

このように5歳児の友達に関する研究を概観していくと、友達と関わっていてその関わりを深めていくものや、クラスで協同的な活動をするものが多い。

ところで、幼稚園においては4歳児から5歳児になる時にクラス替えが行われることがある。

その為、4 歳児で友達だった幼児と他のクラスになることや、教師も新たに変わることも出てくる。

最初の先行研究より幼児一人ひとりが持つ「友達」の概念が一人ひとり異なると言われている。このような中、5 歳児のクラスにおける一斉活動以外の活動の中で幼児の他の幼児との関わりや友達との関係について幼児の視点でしている研究は余りないのではないかと考えられた。そこで、5 歳児の 4 月～1 月にかけてのクラスの様子を見る中で幼児にとって他の幼児から友達へと変化していく姿を観察し考察することを本研究の目的とした。

Ⅱ. 方法

場 所：近畿府県下にある私立幼稚園 5 歳児クラス（ひばり組）

期間と時間：2017 年 4 月から 2018 年 1 月までの月 1～4 回。時間は 9:30～12:30 頃。

倫理的配慮

調査は個人情報保護を遵守することを含め、協力調査園の園長及び保育者に文章を用いて許可を得て行った。本研究における調査対象は全て仮名で取扱い、対象者の人権に配慮した。

対象児：私立幼稚園に在籍する 5 歳児（24 名）

観察方法：筆者が参与観察者として、保育に参加する中でひばり組で起こる他の幼児や友達に関する象徴的な場面を基にその時の幼児の様子（言葉、体の動き、表情など）を観察した。

また、観察者がビデオを回すと子どもの普段の姿が見ることが出来ないことを想定し、メモを取り、それをエピソード記録にまとめた。尚、子どもたちや保育者の日常の姿を観察する為に、参与観察をすることにした。

分析視点：子どもがそのクラスの中で起こる幼児の他の幼児や友達に関する象徴的な場面におけるその時の幼児の様子（言葉、体の動き、表情など）を観察した。そして、幼児にとってその幼児が「他の幼児」か「友達」であるかどうかについて考察した。

Ⅲ. 結果と考察

エピソード① あの子、嫌いなんだ（5 月）

進級当初、ひばり組には「本当は（隣の）つばめ組が良かったんだよね。仲良かった子つばめ組だし」や「ちょっと疲れちゃったんだよね」、「園に行きたくない」という女児や、年中組からの友達と一緒にままごとをしたり、大型積み木で遊んだりする女児や男児の姿があった。

そんな子どもたちがいる 5 月の連休明けのある日の自由活動時。植物がとても好きなユキオは園庭でどんぐりの木を見ていた。ユキオはその下の方にいたカナブンを見つけた。ユキオはカナブンが逃げないように、カナブンが少しでも落ち着く事が出来るようにと緑色の深いバケツ

にそれを入れて眺めていた。しばらく見ていると、ユキオはプラスチックのバケツに入っているカナブンがなんだかかわいそうになってきたようだった。そこで他のバケツにカナブンを移した。そして、カナブンが入っていた緑のバケツにカナブンにとってそこが良い環境になるようにと、砂を入れたり葉っぱを入れたりカナブンの飼育環境を整え再度カナブンをそこに戻した。

そんな時、マイコとカナがやって来てユキオが見ているバケツの中にカナブンがいることを知った。二人にとってカナブンはとても珍しいものだった。だから、ユキオに「ちょっと見せて」と言い、ユキオからカナブンが入ったバケツをとった。さらに、マイコはおもむろにバケツからカナブンを取り手に乗せて「みてみて、カナブンなんだ。すごいでしょ」と教師や他の子どもたちの所に行き見せ始めた。

ユキオは悲しそうな顔をしてその2人を見た。そして、ユキオが「あの子たちの事。年中から嫌いなんだ。いっつも強引にするし、勝手にとっていきし。嫌って言ってもとって言っちゃうし。言っても無理だと思うし」と呟いた。

進級当初「本当は（隣の）つばめ組が良かったんだよね。仲良かった子つばめ組だし」や「ちょっと疲れちゃったんだよね」、「園に行きたくない」と言う姿から進級当初の5歳児の生活に不安を訴える幼児、自分の好きな遊びを見つけて複数の幼児で遊ぶ幼児、一人で遊ぶ幼児というように幼児はそれぞれ様々な姿を見せていた。

ユキオは普段から一人で自分の好きな活動をしていることが多かった。そこに2人の女兒が来て「ちょっと見せて」と言いながらユキオからカナブンを取っていった。

そこでユキオは「あの子たちの事。年中から嫌いなんだ。いっつも強引にするし、勝手にとっていきし。嫌って言ってもとって言っちゃうし。言っても無理だと思うし」と呟いた。これは近くにいた誰かに「代わりに取り返してくれないかなあ？言ってくれないかなあ？」という思いを伝えていたと考えられる。

しかし、とられた時、ユキオはマイコとカナに「嫌」とも「待って」とも「やめて」とも言っていない。さらに、ユキオは「カナブンを取られて嫌だから、取り返して欲しいのだけど」とか「カナブンをとられたからどうしたらいい？」という思いはその呟きから察することは出来るが直接誰にも言っていない。

このようにユキオは自分の気持ちや思いを主体的に言い出せない姿が見られた。また、マイコとカナもユキオに対してユキオの気持ちを積極的に考えていたわけではなかった。従って、この段階ではユキオにとってもマイコとカナにとってもお互いの関係は「他の幼児」である事が伺えた。

エピソード②先生に言いつけてやる（6月）

サキがチアリーディングに使うポンポンを朝の自由遊びの時に使っていた。そのサキの姿を見て、タクヤは「使っちゃだめなのに〜」、「先生に言いつけてやる」と言った。するとサキは大きな声を上げて泣き始めた。

タクヤは泣いているサキに「ごめんね」と言って謝った。しかし、サキは泣き止まなかった。サキは泣きながら「タクヤは謝ったけど、タクヤが「先生に言ってやる」と何度か言ったことがとても嫌だった」と激しく泣いた。サキはなかなか気持ちを切り替える事が出来なかった。サキは気持ちが落ち着くまで「このクラスには嫌な子がいる」と何度か言い、教師にその思いを話し自分の中で気持ちの整理をつけていた。外遊びになりサキの気持ちも切り替わり、笑顔でアツヒロやハヅキらと鬼ごっこした。

外遊びからの帰り道、タクヤはコウジの手が自分にあたったことをアツヒロに伝えた。するとアツヒロはタクヤに「それ、先生にいったん？」と聞いた。タクヤは「ううん、コウジがごめんねって言ってくれたから良いんだ」と言った。するとアツヒロは「コウジってあかんやつやんな」と言った。タクヤはコウジの事を「許したからいいねん」とアツヒロに言った。

この「先生に言いつけてやる」という言葉は保育の様々な場面で聞かれた。そこでこの事に問題意識を持っていた担任のリカ先生はクラスの幼児に自分の気持ちを正直に伝えた。

リカ先生は「みんなは、先生に言うからって言うけど、先生に言ってほしいの？みんなはどうしたいの？自分で言うようにならないと……。それを言わないでね、と自分で言えるようになってほしい。先生、みんなが小学校に行っても誰かにみんなが嫌だなあと思う気持ちを代わりに言ってあげられるわけじゃないし……。勿論、先生はみんなが頑張って言ってもダメだった時はちゃんと話を聞いてあげる。ちゃんと受けとめる。でも、自分達で解決する力をつけていってほしい。」と話した。子どもたちはリカ先生の方をじっと見ながら話を聞いた。

今までの幼稚園の生活の中で、園で起こる様々なトラブルを教師が解決している姿を幼児は目にしてきたのかもしれない。また、幼児の中で自分の思っているネガティブな感情を教師に伝え、教師から言ってもらおうと相手の幼児が怒られたり注意をされたりするように感じる中で、自分の気持ちの整理をしていたことが今までにあったのかもしれない。

そのような積み重ねの中、「先生に言ってやる」という言葉が出てきたのだろう。リカ先生の中に「小学校に向けて子ども同士で自分の気持ちを伝え合うようになって欲しい」というねらいがあったので、クラスの幼児と向き合い真剣にこの話をしたと思われる。

一方、タクヤは「コウジがごめんねって言ってくれたから良いんだ」と言っている。ここから、サキにとってタクヤはトラブルにおいて教師の援助が必要となる「他の幼児」、タクヤにとってサキは話して解決できる「友達」、タクヤとコウジはお互いに「友達」という関係になると考えられた。このように、クラスの中でも幼児同士で一方は「他の幼児」と思っているが「も

う一方は友達」と思っている場合や、お互いに「友達」と思っているような場合があると考察できた。

また、クラスの幼児が謝っても「他の幼児」は許す事が出来ないが、「友達」は許す事が出来存在なのではないかと思われた。

エピソード③ぼくの座る場所（9月）

多くの男児がブロックをして友達と関わって遊ぶ中、ユキオは朝から一人、ブロックで花を作っていた。片付けの時間になると、「ぼく、一人で作ったから一人で片付けなきゃ」と呟き一人で自分の作ったものを片付けた。

片付けが終わり、朝の集いをする為に椅子を「ハ」の字型に列に並べた。ここで幼児は2列での自由席であった為か、男女に分かれて座っていた。このように男女でわかれて座る姿は最近、おやつや給食の時間などにも見られるようになっていた。

ユキオは女児の列から一番遠い男児の列の一番端に座っていた。多くの子どもが座る場所を決め椅子を順次置いていった。

そこに少し遅れてタケシがやって来た。タクヤの横に行き「隣に座りたいんだけど」とタケシは自分の思いをタクヤに伝えた。でも、タクヤの横は両隣とも埋まっていた座れない。そこでタクヤはタケシに「今はもう両方とも座れないよ」と言った。

タケシは空いているところを探す男児の列ほとんど埋まっていた一番端に座っていたユキオの横だけ空いていた。そんな時、タケシは列の一番端に座っていたユキオの顔をじっと見た。ユキオの横には、タケシが良く遊ぶユウジが座っていた。その姿を見たユキオは何も言わず、さっと一つ分の席を空け、端によってタケシが座る場所を作った。タケシはその場所に何も言わず座り、ユウジとおしゃべりをした。ユキオは何も言わず座り続けていた。

朝の集いの後、おやつを食べる為に保育者が机を出した。ユキオは素早く男児が座っていた席を見つけて椅子を置いた。それを見たその場所に座りたかったアツヒロは「え！また入っている」と言った。それを聞いたユキオは「男子は男子。女子は女子」と悲しそうに言った。

今回、タケシは一番一緒に座りたかったタクヤのところに行き、「隣に座りたいんだけど」と言った。それに対しタクヤは「今はもう両方とも座れないよ」と言った。タケシはタクヤからその言葉を聞いて納得した。タケシは空いている席を探した。2人でお互いに納得し問題の解決を図る姿からタケシとタクヤは友達であることが伺える。

次にユキオがタケシに何も言わずに席を譲り、タケシも何も言わずにユウジの隣に座った。タケシにとってその他の幼児であるユキオに対し、何も言わなかった。そして、タケシはユウジと楽しそうに二人でおしゃべりをした。この姿からタケシもユウジもユキオに対しては他の

幼児と思っているように感じた。

しかし、アツヒロの「え！！また入っている」という言葉からアツヒロにとってユキオは友達ではなく他の幼児であることが考えられる。それに対し、「男子は男子。女子は女子」と悲しそうに言ったことからクラスの男児と関わりたいけど上手く関わりきれないユキオの様子が伺えた。

これら一連の事から、ユキオは男児と関わりたいという思いや自分は男児であるという思いもあり男児の列に座ったり、男児が座っているテーブルに椅子を置たりしていることが予想された。つまり、ユキオはクラスの男児に関わりたいという思いはある。しかし、特定のこの幼児と一緒に良いという思いはないように感じた。その為、タケシ、ユウジ、アツヒロにその思いを伝えなくても良かったのではないだろうか。

このことから、少なくともユキオはタケシ、ユウジ、アツヒロが他の幼児であったし、三人にとってもユキオは他の幼児であったことが考察された。

エピソード④お前が座らなきゃ置けたのに（11月）

ユニバーサルスタジオのハロウィンのゾンビナイトに行ったコウジが両手を突き出してフラフラと歩きながら「ゾンビに噛まれたらゾンビになるぞー」と言いながらアツヒロ、タクヤ、タケシ、ユウジ、サトルを追いかけだした。まず近くにいたタケシの肩を噛むフリをして「ゾンビになったぞ」と言った。

ゾンビになったコウジとタケシはゾンビのフリをしてさらに、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトルを歩いて追いかけだした。そこで、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトルはブロックで作った武器を持って「ヤー」っとコウジとタケシのゾンビに向かっていった。ユキオもその様子を見てゾンビごっこに入りたくなり、ブロックで作った武器を持ってその遊びに入った。

ゾンビのコウジは全く倒れる様子がなかった。そこで、コウジは「頭が弱点やで」といいながらゾンビになり、ゾンビごっこをした。

自由遊びの後、保育者が並べた4台の机に子ども達は各々好きな場所に椅子を並べていった。アツヒロとタクヤはユウジと同じテーブルに椅子を置きたかったのですが、二人はユウジがテーブルに椅子を置くのを待っていた。ユウジが机の端に椅子を置きそれを見たタクヤがユウジの横に、ユウジの横の角にアツヒロが椅子を置いた。

そこにユキオがやってきてアツヒロと向き合う形でタクヤの横の角に椅子を置いた。その後、タケシ、コウジ、サトルがやってきたが1テーブルは6人までしか座れない。その為、タケシ、コウジ、サトルの3人は他のテーブルに行って椅子を置いた。

それを見た、アツヒロは「ユキオがその場所に置かなかったら、（あの3人は）置けたのにな」と言い、それにタクヤも同調し「ホントにそうだよな」と言った。

ユキオは俯きながらじっと椅子に座っていた。そこに、ちょうど2席空いているテーブルを

見つけたワカバとナオミがやってきた。クラス全員が座った所で、朝の会が始まった。

ユキオは最近、砂場でトンネルを作ってそこに砂場のおもちゃを電車に見立てて、おもちゃをトンネルにくぐらせて遊ぶことが楽しかった。だから、ユキオはその日もまず砂場にトンネルを掘った。ユキオの近くではアキラとサトルと一緒に一生懸命スコップで山を作っていた。2人が協力して作っていた山はどんどんと大きくなっていった。

トンネルを1つ掘り終えたユキオがふと砂場から顔を上げると。ユウジとサトルが作っていた山が目に入った。それまでユキオは砂場に直接穴を掘っていたが、ユウジとサトルが作った山が大きかったのでその山にもトンネルを掘りおもちゃの電車をくぐらせたかった。そこで、ユキオはユウジとサトルに「トンネルを掘ろう」と誘った。その言葉を聞き、ユウジはユキオと一緒にトンネルを掘りだした。サトルはタクヤらが鬼ごっこをしているのを見てそこに行った。

ユキオとユウジは無言でどんどんトンネルを掘った。とても頑張って掘ったのでトンネルはすぐにできた。ユキオは何も言わず砂場のおもちゃを電車に見立てて山のトンネルに走らせた。ユウジはトンネルを掘り終わると、他の所に行った。

コウジはゾンビになって普段から一緒に遊ぶタケシの肩に噛むふりをした。そしてコウジとタケシは、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトルを追いかけていた。それを見ていたユキオはその遊びを一緒にしたくて、ブロックで作った武器を持って入っていった。友達としてアツヒロ、タクヤ、タケシ、ユウジ、サトル、コウジと一緒に遊んでいるように見えた。

ユキオは男児と同じテーブルがよかったし、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトル、コウジ、タケシと同じ遊びをしていたと思っていたので、同じテーブルに座りたかったと思われる。

しかし、アツヒロ、タクヤは自分達やタケシ、ユウジ、サトル、コウジという友達6人で同じテーブル座りたかった。アツヒロやタクヤにとって、ユキオは一緒に座りたい幼児ではなく友達でもなかった。だから、アツヒロは「ユキオがその場所に置かなかったら、(あの3人は)置けたのにな」という発言をし、タクヤの「ホントにそうだよな」と同調した。このことから、少なくともアツヒロやタクヤにとってユキオは「他の幼児」として捉えていると思われた。

外遊びでユキオは近くで山を作っていたユウジとサトルに「トンネルを掘ろう」と誘っている。そしてユキオとユウジは2人でトンネルを掘ったが、掘り終わるとユキオはユウジに何も言わずにそのトンネルに電車を走らせた。このトンネルを掘るという目的がユキオにとってはユウジやサトルと一緒に遊ぶことではなくトンネルに電車を掘ることであった。その結果、ユウジはほかの所へ遊びに行ってしまった。

ここでユキオはユウジと遊びを共有していなかった。またユキオはゾンビごっこの時にも一緒に遊んでいるようには見えたと、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトル、コウジ、タケシと同

じ思いで遊んでいたかどうかは分からない。

このことから、アツヒロ、タクヤ、ユウジ、サトル、コウジ、タケシだけでなくユキオにとってもその6人は他の幼児であったと考えられた。

エピソード⑤それ、どうやったの？（12月）

朝の自由遊びの後、ユキオはブロックの片付けをし、椅子をコウジの横に置いた。コウジ、ユキオ、タクヤ、サトル、アキラ、ユウカの順で机に椅子を置いた。

クラス全員が椅子に座ったところで教師は墨流しをすること、しかし、クラス全員が一斉に墨流しをする事が出来ないので教師に名前を呼ばれた幼児から墨流しをすることと、墨流しを待つ間は粘土をしていることを伝えた。

粘土を机ごとに取に行く間、机に座ったユキオは早速昨日あった自宅での出来事を自分のその時の気持ちも踏まえて大きな身振り手振りをしながら同じ机に一緒に座っている幼児に伝えた。あまりに大きく手を動かしたのでコウジは「ユキオ、手が当たりそうやん。ユキオ、怒らしたら怖そうや！」と言いながら笑った。それを聞いたユキオが更に手を動かしたのでそのテーブルの幼児は笑った。そして、サトルは「僕は、ユキオが怖くないで」と言い、それを聞いたコウジは「あ、そうか、サトルは空手してるもんね」と言い、テーブルに笑いが広がった。

サトルは同じテーブルに座っていたユキオが細長く粘土を延ばしていることに驚き、「ユキオのすごく長くない？どうやったの？」と聞いた。ユキオは粘土板の上で粘土を両手で転がしながら伸ばしその方法を伝えた。するととても粘土は細長くなった。それを見てサトルも同じように粘土を転がしてみたところ、粘土はとても細長くなった。サトルが伸ばした細長い粘土を見て、コウジはサトルにその作り方を聞いた。サトルは「ユキオに教えてもらったの」と言った。こうしてそのテーブルでは粘土を細長く伸ばすという遊びをした。

その後、外遊びに行くことになり、タクヤはユキオに「今日も砂場で遊ぼう」と誘い、ユキオも笑顔で頷いた。そこにアツヒロがやってきてタクヤを遊びに誘った。しかし、タクヤは「今日はユキオと砂場で遊ぶから」とアツヒロの誘いを断った。

この頃、ユキオはコウジ、タクヤ、サトル、アキラ、ユウカらに対して大きな声で楽しそうに自分のその時の気持ちも含めて自分が経験した話をする場面が見られるようになった。ユキオに対してコウジの「ユキオ、手が当たりそうやん。ユキオ、怒らしたら怖そうや！」やサトルの「僕は、ユキオが怖くないで」と言う発言にもあるようにユキオに対して自分の気持ちを伝える姿があった。

サトルはユキオが作っていた細長い粘土に驚き「どうやったの？」と聞き、コウジもサトルの細長い粘土を見作り方を聞いている。このことから、ユキオらがいたテーブルでは年度を細長く伸ばすという遊びが広がっていった。このことから、ユキオ、コウジ、サトル、タクヤ、ア

キラ、ユウカが教師の援助なく一緒に活動する楽しさを味わっていることが伺えた。

さらに、外遊びに行く時に、タクヤがユキオに「今日も砂場で遊ぼう」と誘い、ユキオが笑顔で頷いている姿から、タクヤにとってもユキオにとっても、一緒に遊んで楽しい幼児、すなわちお互いにとって友達と言えると思察できた。

エピソード⑥自分たちで問題解決（1月）

自由遊びの時にタクヤがブロックを持って歩いていた。そこに遊びが見つからず手持ち無沙汰にしている、タクヤと一緒に遊びたかったアツヒロがやって来た。その瞬間、アツヒロはタクヤが持っていたブロックをとった。タクヤは「返して!」と言ったがタクヤと関わりをもちたかったアツヒロは持ったまま返そうとしなかった。そんな時、教師が片付けの声掛けをした。

タクヤは自分の気持ちを切り替えるため、部屋の隅に行きおもちゃを触った。2分ほどすると気分が変わったのか片付けを始めた。片付けを終えたタクヤはクラスで1番に椅子を並べた。

タクヤは最近よく砂場で基地を作って一緒に遊んでいるユキオに「横に来て!」と誘った。そこでユキオはタクヤの横に座った。そこに、サトルとヨウコがやって来た。サトルとヨウコはタクヤの横に座りたかったので、ユキオとは反対側のタクヤの横に二人とも座ろうとした。

サトルとヨウコはタクヤの横にどちらが座るかで揉めた。そしてサトルとヨウコは椅子をガチガチとぶつからせた。ヨウコが強引にタクヤの横に椅子を入れようと椅子を大きく動かすと、ヨウコの椅子がユキオの足にあたった。ユキオはすぐにヨウコに対して「2回椅子があたった」と言った。ヨウコはバツの悪そうな顔をした。

ユキオはタクヤの横をめぐってサトルとヨウコの二人が揉めている姿を見て「(サトルとヨウコで)ジャンケンして決めたら?」と提案した。サトルとヨウコはユキオの案を受け入れてジャンケンをしてタクヤの横に座る人を決めることにした。ジャンケンをするとサトルがグーをだしヨウコとのジャンケンに勝った。ジャンケンに負けたヨウコは椅子を持って他の所に行きサトルはタクヤの横に座った。

タクヤ、サトル、ユキオは3人でおしゃべりをした。その中でタクヤの表情が少しずつ変わっていった。

同日、椅子並べで再びもめる姿があった。タクヤはサトルと一緒に座りたかった。ヨウコはタクヤと一緒に座りたかった。サトルはユキオとすわりたかった。タクヤがサトルに「一緒に座ろう」と誘うと、「無理、座りたい子がいる」と言った。すると、タクヤは「サトルが真ん中に座ったら座れるよ」と提案した。ユキオが椅子を置いた。サトルはユキオの横に行って座った。それを見て、タクヤもサトルの横に座り、ヨウコもその横に座った。

このエピソードの中で、ユキオは椅子並べにおいて以前のように黙って譲るだけではなく、

自分の場所も確保しながらサトルとヨウコに対し、「ジャンケンして決めたら？」と提案している。サトルとヨウコもその提案に従いジャンケンをしてタクヤの横に座る人を決め、負けたヨウコは気持ちを切り替え別の場所を探している。ここから、「友達」であるタクヤやサトルと一緒に座りたいという強い思いが感じられた。

その後の椅子並べではタクヤがサトル、ユキオ、ヨウコの気持ちが上手く解消できるようにタクヤはお互いの思いを尊重しながら座り方の提案をした。このように相手の立場になって行動できるようになってきていることからタクヤ、サトル、ユキオ、ヨウコに友達という気持ちがあるように思われた。

IV. 総合的考察

ユキオの姿から他の幼児から友達に変わっていく姿を考察する。

エピソード①で他の幼児からの行為に対し自分の気持ちを「言っても無駄だし」と呟くように言い、直接相手に伝えていない。そして、誰かが何とかして解決してくれるだろうという思いを持っているように感じられた。エピソード③でユキオはタケシに席を譲る姿があった。しかし、ユキオは自分は男児であるし男児と関わりたいという思いはあったものの、男児であればだれでも良かったのではないかと考察された。だから、アツヒロから嫌な事を言われた後も「男子は男子。女子は女子」と発言したと思われた。

エピソード④でユキオはエピソード③と同じように椅子並べにおいて男児と同じテーブルに座ろうとし、アツヒロやタクヤから嫌な事を言われている。しかし、エピソード③と大きく違うのは椅子並べ前の遊びの中で、ユキオはゾンビごっこに入ろうとしている。これはこの遊びを一緒にしたいというユキオの積極的な思いであった。このことから一緒に遊んだと思っていたので一緒に座りたいというユキオの思いが現れていたのではないかと感じた。

しかし、このゾンビごっこもトンネル掘りも一緒に遊んではいるが他の幼児と意思の共有も、それを補足する言葉のやり取りもなかった。だから、遊びが広がることはなかった。つまりユキオはその遊びはしたいが一緒に同じ気持ちや考えで遊んではいなかった。だから、同じ遊びをした他の幼児にとってもユキオは他の幼児であり、ユキオにとっても一緒に活動をした幼児は他の幼児であったように推察された。

エピソード⑤になると一転して、ユキオは饒舌に自分の気持ちを踏まえて大きな声で話をしていた。その中で、同じテーブルの幼児と教師の援助なく遊びや会話を共有し楽しむ姿やタクヤとユキオで砂場遊びを共有している姿が見られた。これらのことから、コウジ、ユキオ、タクヤ、サトル、アキラ、ユウカが友達関係を築いている様子が伺えた。

エピソード⑥でユキオは自分の座る場所を確保しながら時に自分の気持ちも伝え問題解決の提案をしているし、自分の座る場所を無言で譲ることはなかったことからタクヤやサトルに対して友達であると思っていた。エピソード③ではこの幼児の隣に座りたいという強い思いはあ

まり感じられなかった。このことから、一緒に座りたい、この幼児が良いという感情を友達に対して持つことが言えた。

このことから、ユキオの「他の幼児」から「友達」に変化していく過程において①この遊びを一緒にしたいという思いを持つこと、②同じイメージを持って遊びを行い、時に言葉で補足しながら遊びを共有すること、③自分の気持ちを言葉で表現すること、④この幼児がいいという感情を持つ様子が見られた。

この姿は平成20年の幼稚園教育要領解説の中の2教育課程の編成(4)入園から修了に至るまでの長期的な視野をもつこと²⁷⁾の中に記された幼児の姿とよく似ている。

①、②の姿は、ウ) 友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期、エ) 友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期²⁸⁾と重なっている。

しかし、幼児にとって「他の幼児」が「友達」になっていく過程ではそれと結びつく「遊びを一緒にしたいという思い」や「同じイメージを持って遊びを行い、時に言葉で補足しながら遊びを共有すること」に付け加え、「自分の気持ちの表現」と「特定の幼児に対する思い」が出てくることが分かった。

V. 今後の課題

小学校との連携を考え、5歳児の友達に関する研究を見ると最初から友達と関わっている研究や協同性に関するものが多いように感じた。しかし、5歳児だからと言って友達関係をスムーズに作れるのか、5歳児だから友達同士協力できるのだろうか、5歳児にとっても「他の幼児」と「友達」の違いがあるのではないかと、思い今回の研究をした。

今回の研究では「友達」というキーワードに絞って見たが「仲間」という文言に関しては考えていない。保育所保育指針において「仲間」が使用されていることから「他の幼児」と「仲間」についても検討したい。

謝辞：この論文の作成に当たってご協力いただきました幼稚園の園長先生、先生方、子どもたちに感謝いたします。

<注>

¹⁾子どもや教員の交流は進んでいるが教育課程の接続が不十分であること、子ども自身が基本的な技能を身につけていないことなどが言われている。

²⁾ 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.3

³⁾ 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.4,5

⁴⁾ 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.2

⁵⁾ 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.3

⁶⁾ 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.6

-
- 7) 新村出 2008 広辞苑第六版 岩波書店 p.2036
- 8) 松村明編者 2006 大辞林第三版 三省堂 p.1835
- 9) 梅棹忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明 1995 カラー版 日本語大辞典第二版 講談社 p.1565
- 10) 佐藤宏 2006 精選版 日本国語大辞典第2巻 小学館 p.1861
- 11) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 p.59,60
- 12) ここでいう幼児が一体的に育まれる資質能力とは、(1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、(2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、(3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」のことであり、領域のねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。
- 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.3
- 13) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 p.58
- 14) 文部科学省 2017 幼稚園教育要領 p.7
- 15) 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説 p.44
- 16) 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説 p.46
- 17) 金子亜由美 松延愛美 小谷宣路 2012 5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査(第2報)保育内容としての「人間関係」を考える 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 11 pp.47-54
- 18) 上田ますみ 高本洋 2003 友達とかかわり合いながら自分達が創る自分達の生活(5歳児):「つきほしかがやき隊」・「サッカー」を視点に(第2章事例研究)(第1部金沢大学教育学部附属幼稚園第49回教育研究会に向けて) 研究紀要 49 pp.45-63
- 19) 広兼陸 2016 ルールのある遊びを通して5歳児の人とかかわる力を育む 広島大学附属三原学校園研究紀要 6 pp.51-56
- 20) 林幸恵 2009 「伝えあいひびきあう」関係を育む協同的な学びの実践(5歳児「恐竜ランドを作ろう」) 福井大学教育実践研究 33 p.117-122
- 21) 小林功 高柳恭子 岩渕千鶴子 五十嵐市郎 原由美 前原由紀 稲川知美 星野さやか 2005 協同的な活動の模索 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 28 pp.197-206
- 22) 上林千秋 2013 5歳児の協同的な遊びの発達を支える保育のポイントについての一考察 群馬大学教育実践研究 30 pp.169-17
- 23) 小林功 高柳恭子 岩渕千鶴子 五十嵐市郎 原由美 前原由紀 稲川知美 星野さやか 2005 協同的な活動の模索 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 28 pp.197-206
- 24) 志村聡子 篠原直美 廣瀬由起子 成川陽平 石川悦子 2007 5歳児3学期の行事への取り組みにとらえる「協同的な学び」:子どもたちを支える保育者の援助 埼玉学園大学紀要人間学部篇 7 pp.115-126
- 25) 齋藤久美子 無藤隆 2009 幼稚園5歳児クラスにおける協同的な活動の分析:保育者の支援を中心に 湘北紀要(30) pp.1-13
- 26) 志村聡子 2009 5歳児の「協同的な学び」を実現する援助のあり方をさぐる:多様な集団への関わりと個別の課題への配慮 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 9 pp.165-178
- 27) ここでは幼児が入園から終了までの発達の時期のひとつの視点として、ア) 一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期、イ) 周囲の人やものへの興味や関心が広がり、生活の仕方やきまりが分かり、自分で遊びを広げていく時期、ウ) 友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期、エ) 友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期、オ) 友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し、深めていく時期が示されている。
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 p.49
- 28) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 p.49